

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「やるからには心を込めて」

アメリカ

中西 千代香

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

やるからには心を込めて

中西 千代香（なかにし・ちよか）

人一倍元気だった母がくも膜下出血で急逝したのは三年前の夏だった。日本から知らせを受け、当時住んでいたニューヨークから駆け付けたものの、昏睡状態から覚めることもなく、母は逝ってしまった。遺言も最後の言葉もなく。ドラマなどで、死期を悟った登場人物が家族や友人を集めて、最後に別れの言葉を交わす、そんな場面を見るたびに羨ましくなる。私は最期の言葉どころか、海外生活のため、最後に会ったのさえ、一年も前のことだった。倒れる前日にテレビ電話はしたが、母はとても元気で、特段思い返すような会話はしなかった。そんなあつけない別れだったが、母を思い出すたびに、蘇ってくる言葉がある。

「やるからには心を込めて。」

何事にも手を抜かず、心を込めてやる人だった。料理など家事にとどまらず、近所で具合の悪い人がいれば駆け付け、私や姉の学校行事には必ず手伝いに参じ、保護者会の役員をし、友人の悩みごとには、我がことのように悩み、真摯に相談にのっていた。そんな母の姿を、お節介だと冷ややかにみていた時期もあったが、母の人望の厚さを見るにつけ、これが母なんだと受け入れるようになっていた。

私がニューヨークで出産した後、手伝いに来てくれた時もそうだった。孫かわいさもあつただろうが、いつも以上にはりきり、手料理を私たち家族だけでなく、近所の友人たちにもふるまったり、孫を公園に連れて行き、言葉の壁も何のその、いわゆるママ友とでもいうのだろうか、友達を作ってきたりもしていた。そんな時日本にいる母の友人から、親子関係がうまくいかないと相談のメールが来た。母は夜遅くまで、その相談にどう答えようか考え、何度もメールを読み返しては書き直していた。日中忙しくしていた母を見ていた私は、

「もういいんじゃない。本人が解決するしかないよ。」

と、声をかけたが、相談してきている友人の気持ちを少しでも明るくできたらと一心にメールを打っていた。

料理は手抜きをしない母の得意分野だった。母の手料理を当たり前のこととして育ってきた私だったが、大人になり、外食をよくするようになり、「あれ、これって家で食べる方がおいしい」と、初めてそのすごさを知った。思い起こせば、我が家に客人が多かったのも、母の料理目当てということもあっただろう。携帯電話などなかった時代、急に友人を連れて帰ることも多かったが、「予め言つてよ」の言葉もなく、笑顔とともに食事を出してくれていた。

実際に主婦になり、家族に料理を作る立場になると、一食一食栄養がありおいしいものを作るのがどれだけ大変か分かってくる。ともすると、面倒だな、手抜きしちゃえという気持ちになる。そんな時思い出す母の姿がある。もう何度目になるのか、ニューヨークに孫に会いに来てくれた時のこと、母はミートソースを作ってくれたことになったが、あいにくオリーブオイルを切らしていた。サラダ油があるからそれでいいよ、という私の提案をふりきり、やっぱり食べてもらうからには納得のいくものが作りたいと、一人でスーパーまでオリーブオイルを探しに行った。帰ってきた時の母の笑顔、そして「一人で街を闊歩して、私もすっかりニュー Yorker だわ」と、楽しそうに言っていた姿が忘れられない。心を込めてやること、そしてそれを楽しんでやるのが母だった。

就職して仕事の忙しさや辛さに辞めたいと思った時、

「あなたがその仕事を得たために、その仕事につけなかった人もいるのよ。その人たちの事も思つて、心を込めてやつてごらん。」

という一言で、私の仕事に対する姿勢が変わつた。それは今でも、ボランティアとして、地域活動に参加したり、子どもの学校の手伝いをしたりする際に肝に銘じていることである。おかげで、今まで何度も引越しをしてきたが、その土地その土地でボランティア通じていい人間関係を築いてこられた。

夫の海外転勤に伴い仕事をやめて専業主婦になり、家事にやりがいを見つけられなかった時、

「どうせやるなら、心を込めてにこやかにやってみたら。」

という一言で、同じことでも明るい気持ちでやると気分が変わることが体得できた。自分の気持ちが変わると、不思議と楽しいことも増えていった。その心の持ちようが、度重なる引越しや慣れない異国での暮らしを、辛く大変なことではなく、前向きで楽しいことに変えてくれた。新しい土地を、私の第二のふるさとだと思えるようにしてくれた。

葬儀に来てくださった母の友人や親せきが、

「どうして先に逝つちやつたの。あなたに看取ってもらおうと思つていたのに。」

と泣きすがつていた。他界後三年たった今でも

「おばさんの手料理もつと食べたかつたな。」

と言つてくれる友人や元同僚がいる。ああ、これが母の生き様だったのだなと思う。心を込めてやったことは人の記憶に残るものなのだなど。

「お腹空いた。」

「もう？ さつき食べたばかりでしょ。」

夏休み中何度も繰り返される息子と私の会話。また作るのか面倒だな、ではなく、こんなに食べてくれて嬉しいな、よし、またおいしくて栄養あるものを作るぞ、と思う時、私の中に母は生きている。